



## 1. プロローグ 女子会

卒業式が近づく土曜日、冬の精が最後の力を振り絞って春の到来を遅らせているような寒い日だった。

暖房が低くうなり、温もった空気が運動場に面した窓ガラスを白く曇らせていた。昼を少し過ぎていたが、教室内には多数の生徒の姿があった。

市の教育委員会の方針により、この色彩学園では偶数週の土曜日に半日の授業が復活していた。

そのために、生徒が残っていること自体はなんら不思議ではない。

完全週休2日が始まる前はどの地域の学校でもあった、いわゆる半ドンを終えた放課後の風景——そう片付けてしまうには室内の様子は異様に過ぎた。

机が環状に並べられ、部屋の中央に、レクリエーションを行う時のさながらに、広いスペースが形成されていた。

空間の中心に、4つの机が班を作る時さながらに引っ付けて並べてあった。

その上に一人の男子が拘束されていた。

素裸である。

上も下もひん剥かれた状態で、ゴム製のとび縄を使って手足を4つの机の角に縛り付けられていた。

彼の周りには複数人の女子生徒が群がっている。

女子生徒たちは、嘲笑と優越の混じった笑みとスマートフォンレンズを少年に向けながら、男子生徒の丸出しになった性器を弄んでいた。

皮も剥けていない未成熟なそれは、少女らの手や指で、突かれ、扱かれ、時には先端部を磨くように擦り上げられていた。

変化をつけて、じつくりといったぶられながら、しかしその小さな男の証は歓喜するようにひくひくと脈打っている。

よく見ると根元の部分を髪留め用のゴム紐で縛られている。

それにより、射精を封じられているのである。

気持ちよくてもいけない、そんな拷問じみた生殺し責めを受ける少年は目に涙を溜め、言葉にすらなっていない必死のよがりごえを上げていた。

これは女子の間で『手術』と呼ばれる遊戯で、男子イジメの方法の一つだ。

由来が被害者のポーズにあることは言うまでもない。男子生徒の姿は、朝の子供向け番組などで悪の組織に改造手術を受ける犠牲者そっくりだった。

ごっこ遊びのようだがその実は恐ろしい性的虐待である。

『手術』を受けた男の子は、例外なく快樂で悶え狂わされ、身体ではなく精神を治療されてしまうのだった。

女子に絶対逆らわない従順な下僕へと——。

この『手術』をはじめ、趣向を凝らしたものから単純なものまで、色々な嗜虐的遊戯が教室のあちこちで行われているのであった。

たとえば、脱ぎたてのパンツを頭から被せられ、「変態変態」と罵られながら自慰行為を強制されている下級生がある。

たとえば、パンツ一枚にされ人間サンドバッグにされている男子生徒がある。たとえば、3人の地味な少女に押し倒され、奉仕を強要される美少年もいた。

かつては女子の憧れの的だったスポーツ少年だが、今やクラス内ヒエラルキーの下層に位置する女子の性欲と支配欲のはけ口に過ぎなかった。

他にもジョークグッズとして売られている卑猥な道具で性器や肛門を弄ばれるものや、女子生徒の椅子にされているものもいた。

嫩られ方は様々で、共通していることと言えば、読んで字の如く嫩られている全員が男子で、嫩るのは全員が女子であるということ。

そして、ひどい仕打ちを受けている男子達が、一様に悦んでいるということだけだった。この異様な催しは、宗教の集會に足を運ぶ信徒がその習慣を当然であると信じているのと同じ程度に、生徒たちにとっては当たり前の日常だった。

女子会——この放課後の集まりのことを、女子達は最初に男子イジメという遊びを発明した少女にならってそう呼んでいた。

少女の名は白峰しろみね聖蘭。クラス委員長で、クラスのまとめ役でもある、先生や保護者の間

では真面目で通っている生徒だった。

聖蘭も当然、今日の女子会に参加していた。

教壇に腰かけた彼女は、パーカーをたくし上げた格好で、おっぱいを男子生徒に吸わせ、股間のささやかな屹立をシコシコと愛撫していた。



「せーらおねーちゃんのおっぱいおいしい？ やーんこくこくって肯いて可愛い♡  
よしよし、おりこーさん♡」

白峰聖蘭は美少女だ。

学年の平均よりも4センチ背の高い、金髪のピッグテールが良く似合う、抜けるような色白の、眼のくりくりと大きな、将来の美人を約束された飛び切りの美少女だ。

しかし彼女を見て、誰もが一番に注目するのは、その整った顔立ちの可愛さよりもまず、胸、いやおっぱいだった。

大きかった。年の割にはというようなレベルではない。巨乳が売りのグラビアアイドルすら、比較にならないほど、巨大だった——しかもそれでいて、形が崩れていない——バストサイズは「カップを超えてなお成長中だった。

そんな規格外の爆乳で男子の顔を押しつぶし、聖蘭は丸出しになった性器をリズムカルに扱き上げていく。

「おっぱいちゅちゅしながら、おちんちんシコシコってされるの気持ちいいでしょ？  
男の子はおっぱいに甘えるの大好きでちゅもんねくすくす♡」

「んんっ……ふうう……んっ♡」

蜜を煮詰めたように甘ったるい淫語と共に、少女の可愛らしい手が上下する。

ストロークの度に包皮から亀頭が露出し、腰をひくひくと痙攣させるが、少年は乳首を吸うのを止めたりはしない。

普段は豊満な乳房の中に埋もれている乳頭は、刺激を受けて勃起し、つんと小生意気に突き出していた。

その硬くしこった感触と顔を包む柔らかさに、少年は夢中になっていた。

勃起乳首を口に含んでちゅぱちゅぱと吸い上げ、舌先で拙く転がしていく。

「あっは♡ ゆーき君、一生懸命ちゅぱちゅぱしちゅって♡ おっぱいおいしいでちゅか？ いっぱいおっぱい飲んで大きくなりまちようね♡」

「んふう、んんっ……♡ んちゅ、ちゅうう……♡」

「あくおちんちんどんどん大きくなってきまちゅね♡ こんな風に、赤ちゃん言葉使われて、コーンしちやいまちたか？ ゆーき君も、立派なM男君になっちゃいまちたね♡ おりこーさん♡ もっとおっぱい漬けにしてあげまちゅからね♡ くすくす♡」

おっぱいしか目に入っていない少年に、聖蘭は優越感たつぷりに笑いかけ、だらしなく余った皮で中身を摩擦するように、未成熟な肉茎を扱きぬく。

溢れ出た先走りが、くちゅくちゅと音を立てる度に、少年の背筋を官能の怖気が走った。

「あひいっ……せーらお姉ちゃん……ぼく、もう……」

「なに？ 余ったお皮くちゅくちゅされたて我慢できなくなっちゃう？ また、白いお漏らしピュッピュッしちやいまちゅか？」

少年はすでにこの後どうなるか知っていた。

正確に言えば、一つ年下の彼に聖蘭が教え込んだのであった。

その行為がもたらす快感と、出そうな時にどうすればいいかを。

「イっちゃうイきます、せーらお姉ちゃんイかせてえ……！！」

「イきたいんだ♡ だったら、一つ教えてくれまちゅか？」

聖蘭は性器と呼ぶには可愛らしい男の子の大事なところをくにゅくにゅと弄びながら、反対の手で少年の頭を撫で優しく問いかける。

「え、な、なにを……?」

「あのねえ……ゆーき君のお兄ちゃんとそのお友達が、いつもどこで集まってるか、せーらお姉ちゃんに教えて欲しいなあ♡」

「え、え、え……!?!」

少年の顔に混乱と戸惑いが広がる。

その表情を押し潰すように聖蘭は爆乳を彼の顔に押し付けた。

「せーらお姉ちゃんね、赤畑君達にちよつと用事があるんだ。黄崎君の弟くんなら、どこにいるか知ってるよねえ……♡」

「そ、それは……その……秘密のこと……」

「だから、その秘密、教えてくれたら、気持ちいいびゅー……♡ させてあげまぢゅー♡ お兄ちゃんを裏切ったイケナイ射精……とつても気持ちいいぢゅからね……♡ くすくす♡」

逆手に握り替え、ねじりを加えてペニスをねっとりとは抜き上げる。

使い慣れた楽器を扱うような、自然で巧みな手と指の淫らな愛撫に、少年の腰がもどかしげに戦慄いた。

「そ、そんなの……」

「いいんでちゅよ、無理しなくつても……ゆーき君が怒られることもないし、お兄ちゃん達には酷いことしないよ♡ ただ、ゆーき君と同じように、教えてあげるだけ……男子は女子に敵わないって……ね♡ だからお姉ちゃんに大事な秘密、教えてくだちゅ♡」  
豊満なおっぱいをグイグイと押し付けながらの甘い囁き。墮落を誘う可愛らしい、爆乳の悪魔の囁き。だが、完全に聖蘭の虜となっている少年は、それが良くないことだと心のどこかで感じつつも、抵抗できなかった。

「あうう……ごめんなさい、お兄ちゃん……かつちゃんさん……」

少年は泣きそうになりながら、聖蘭の質問に答えていた。

「へえ……そんなところに……ふふふ、ありがと♡ ゆーき君♡ 射精と引き換えに裏切つてとつても悪い子ぢゅね♡」

「うう、悪い子……」

「でも……せーらお姉ちゃんは、そういう悪い子ちゃん、大ぢゅきでちゅからね♡」  
そう言つて聖蘭は少年の頭を掻き抱き、本当の姉のように優しく抱擁した。

少年の心に、トキメキとでも言いたくなるような甘やかな感情が充溢する。少年らしい、もやもやとした罪悪感と背徳感が幸福感と混ざり合つて、なんだかよくわからないうちに、目の前の豊かな柔乳に顔を押し付けていた。唇で硬くなつて突き出した乳首を探り当て、縫るように吸い付いていた。

「でそれじゃあ、ご褒美でちゅよ……ほうら、おちんちんこしゅこしゅ♡ お姉ちゃんの爆乳おっぱい……ちゅちゅしながら白白お漏らし、しちやおうね♡」

聖蘭は勝ち誇つたように笑うと、少年を一息にイかせにかかった。

裏筋や会陰を可愛がりつつ、皮の上から敏感な亀頭を指の輪で抜き上げていく。

今まで何人もの男子を快樂だけで屈服させてきた聖蘭のテクニクは、風俗嬢顔負けだ。

大人の男でも、彼女の手にかかればあっさりと蕩かされてしまう。それは彼女自身が何  
度も証明した事実だった。

そんな最高の授乳手コキは、つい先日までオナニーも知らなかった少年を、瞬く間に限  
界まで追い詰めていった。

「んちゅ、んんっ……せーらお姉ちゃん……僕、もう……」

「ふふふ、もう頭の中射精のことしかないみたいだね♡ ほんと男子って単純……♡  
さあ、せーらお姉ちゃんのおっぱいシコシコでえ……はい、ぴゅっ♡ ぴゅっ♡ ぴゅ  
ううううっ♡」

「んっ、んんっ、んふうううっ……♡」



乳首に手と口で縋りつきながら、少年は絶頂した。腰が反り限界まで勃起した少年の性器  
が白濁した液を勢いよく噴出する。

「あん♡ 凄い勢い♡ お姉ちゃんが金玉の中身空っぽになるまで、ぜーんぶ搾り出し  
てあげまぢゅからね♡ はいぴゅっぴゅっぴゅっ♡」

聖蘭は脈動を愉しむように、射精中のソレを可愛がるく。

根元から亀頭に向かって中身を搾り出すような手つきに合わせて、快感の液体が竿の芯  
を擦りながらびゅくびゅくと放出される。

少年の少ない経験の中でも、もつとも心地よい射精。

罪の意識も後ろめたさも何もかも洗い流す、真つ白な快感が、少年の思考を埋め尽くす。

「あああ……あああ……せーら、お姉ちゃん……♡」

射精が終わってなおも引き続くトロトロとした恍惚感を味わいながら、少年は媚びるよ  
うに聖蘭のおっぱいにしがみついた。

「一杯ぴゅっぴゅ出来ておりこうでちゅね♡ くすくす……♡ イったばかりで疲れてるだろうけど、ゆーき君にはまだしてもらうことがありまちゅからね……♡」

聖蘭は少年を教壇に座らせて居ずまいを直すと、女子の何人かに声をかけて呼び寄せた。

「秘密の場所も聞きだしたことだし、さっそく男子狩りにいこっか♪ キツカとユーリと……あと適当に7、8人ついてきて」

「なあせーら、別にあんな風にしなくったって、あんなチビちよつとボコってやったら簡単に聞きだせただろ」

ユーリと呼ばれたショートカットのボーイッシュな少女は、そう言って鼻の頭を掻いた。さつきまで生きたサンドバッグを相手に格闘技の練習めいた遊びをしていたせいで、体操着が少し汗ばんでいた。

「んー簡単だけど……この子可愛いし、可愛がってあげたくなっちゃって♪」

聖蘭は少年の衣服を整え、丰满な胸で顔を包み込んだ。巨大な柔肉に包み込まれた少年は、嬉しそうに声を上げた。

「それにさあ、簡単にクリアできるゲームってつままないじゃない。こういうことはちやんと愉しむのがせーらのポリシーってやつなの♪」

天使のように明るい悪魔の笑みを浮かべ、白峰聖蘭は教室を後にした。

## 2. 反女子会同盟

第一理科実験室の中は暗かった。カーテンを閉め切って、電灯を切ってあるためだ。ステンレスの流し台が備え付けられた6人掛けの実験台が3つずつ、室内の前後に並び、少しサイズの大きい教員用の実験台が黒板の前にある。

灯りはその、実験台の上のスタンド照明が1つだけ。周囲の闇を押しつけて、オレンジ色に光る小さな空間をそこに作り上げていた。

その光に誘われたように、数人の男子生徒が机の周りにたむろしている。

特別教室は授業の時を除いて生徒の無断での立ち入りは禁止である。

当然、放課後の理科室には鍵がかかっている。

彼らは模型などを展示するための、廊下に繋がる棚から侵入したのである。

廊下側に面したガラス戸の鍵をあらかじめ空けておいたのである。

授業が終われば、理科室には誰も来ない。

少年たちはこの秘密の出入り口から秘密の場所に集まり、犯罪の微かな優越に浸りながら放課後の退屈な時間を空費するのであった。

「なあかつちん。やつぱ直接シメに行くのが手っ取り早いんじゃないの？」

帽子を被った小柄な少年が椅子を使って器用に逆立ちをしながら、かつちんこと

赤畑克己あかはたかつみに言った。

8

赤畑克己は学校一の不良であった。

身体の大きさは年相応だが、腕っぷしには絶対の自信があった。

年上相手でも一步も引かない、向こう見ずなまでの負けん気の強さのせいで、小さいころから喧嘩ばかりしてきた。

大人からは疎んじられていたが、少年なりの正義や価値観を裏切ることが大嫌いな熱血漢で、同輩からの信頼は厚かった。

「あいつらのこと調べて分かっただろ？ 絶対おかしい。あんなの……狂ってる。このまま野放しにして置いちゃぜつたいに良くないと思うんだ」

逆立ちの姿勢からアクロバティックに体をひねって、背もたれの無い丸椅子に腰を下ろして先を続ける小柄な少年は黄崎俊太きさきしゅんただ。愛称はシュン。

前へならえて腰に手を当てるような少年だが、その分すばしっこく、徒競走ではいつもぶつちぎりの一等賞で、少林寺の黒帯、運動の方は抜群だが、勉強の方はからつきしというタイプのお調子者だ。

「シュンの言う通りだ。あいつら下級生まで変な集会にひき込んでやがる」

机に頬杖をついたまま抑揚のない口調で俊太の言葉を引き継いだのは、青海誠せいかいまこと、前の二人と違ってあだ名は特にない。

不思議な存在感を持つ少年だった。身長がクラスどころか学校で一番で、無愛想、無表情、無感動の3無い主義を掲げ、かてて加えて普段から目つきが悪いせいも、他人からは怖い人として見られることも少なくなかった。

青海柔道場の跡取りで、二段の実力者であるが、頭脳は明晰で思慮深く、短気な2人をいさめる役割に回ることが多い、言ってみれば参謀役というポジションだった。

「もうすぐ卒業しちゃう俺らには関係ないかもしれないけど、後輩が去勢された犬みたいになっちゃうのを指咥えてみてもらえねえだろ？ かつちゃん」

俊太はそう言って克己の肩を叩いた。

この三人の少年——赤畑克己、黄崎俊太、青海誠らがいっごころからつるむようになったのか、それは彼ら自身にも思い出せなかった。

それほど長い付き合いだった。

克己をリーダー格として、少年なりの正義感に基づいて大人から眉を顰められるような素行を繰り返した結果、彼らは『色彩の信号機トリオ』と呼び習わされ、周辺の学区にまで悪名を轟かせるほどになっていた。

そんな彼らが頭を悩ませているのは『女子会』のことであった。

彼らがこの学校の異変を感じ始めたのは2学期の終盤だった。

3人は授業もサボりがちで、放課後はさっさと校外へ繰り出していたために、進行しつつある変化に気が付かないでいたのだった。

下級生や同年の一部の男子の様子があからさまに変わっていたのである。

女子の顔色を窺うようにビクビクとする者が多く、女子と口論したり女子に悪戯をしたりする者がめっきり減っていた。

それと同時に、校舎裏や屋上やトイレで女子に囲まれて虐めを受ける男子生徒がちらほらとみられるようになっていた。

そんな場面に遭遇した3人は義憤にかられ女子生徒に因縁をつけたり威嚇したりして、何度か男子生徒を助けていた。

そして、虐められていた彼らから話を聞くうちに、ある一人の少女を中心とした『女子会』と呼ばれる不穏で不遜な集まりがあることを知ったのであった。

女子会——その秘密の会合は呼び方こそ同一だが、メディアによって広められた女の子が集まってお話ししましょう、というヘソで茶が沸くような（克己流の言いざまである）集いとはまるで異なっていた。

そこで行われるのは、女子による男子への陰湿なイジメであるという——秘密の集いであるために、それが本当かどうか、直接その場に行ったことが無い赤畑達には知りようがなかった。

しかし、噂話や、女子の会話を盗み聞きして得た情報を総合的に判断した結果、事実であるとしたか考えられなかった。

『女子会』は今や学校最大の秘密結社めいた組織だった。

生徒会よりも発言力は上で、参加していない女子は『女子会』のメンツに目をつけられることを極度に恐れていた。

『呼び出し』と称して会へ連れていかれた男子は、女に絶対に逆らえない腑抜けにされてしまうのだった。

上級生の中にも餌食になった男子が両手に余るほどにいた。

そればかりか生徒を叱る立場にあるはずの先生の中にも、彼女らの手玉に取られているものがあるという噂さえあった。

「実はな」

むっつりと考えていた克己が、呟くように言った。

周囲の視線が集まる

部屋の中には3人の他に、彼らと仲のいい男子や、女子に虐められていた下級生の姿があった。

総勢は9名。いわば、反女子会のグループだった。

「あいつら珠美にも変なこと吹き込んでやがるらしいんだ。というのみな」

珠美、というのは赤畑克己の2つ下の妹である。

運動は苦手だが勉強は得意、礼儀正しく大人しい、兄の克己とは正反対の優等生タイプの可愛らしい少女だ。

お兄ちゃん子で、男らしい兄の克己を心から尊敬していた。

克己もまた、自分を慕ってくれる良く出来た妹を口には出さないが自慢に思っていた。

さて、そんな珠美は昨日学校からいつもより遅く帰ってくると、兄にこんなことを訊ねたのである。

「ねえ、お兄ちゃん。男の子って、虐められるのが嬉しいの？」

純粹な疑問のようだったが、克己は身裡がさっと冷たくなるのを感じた。

何故そんなことを聞くのかときつい口調で聞いたすと、珠美は上級生に誘われ『女子会』に顔を出したことで、そこで男の子が虐められていたこと、そして上級生から「男子は女子に虐められるのが嬉しいの。だから、あれは酷いことじゃない」という意味のことを言われたと戸惑いながら語ったのだった。

「珠美のやつは賢いから、俺がちゃんとそうじゃないって教えたら、分かってくれたがよ。虐められて嬉しい、だなんて言い草で下級生を洗脳しようとしてやがるんだ」

「上級生に言われたら、信じちまうやつもいるだろうなあ」

俊太はうんざりしたように言った。

「前みたいに俺らにちよっかい出してくるならまだしも、妹にそんな歪んだ観念吹き込まれた日にゃ黙っちゃおけねえ、兄として」

相当頭に来ているのか、克己は腕組みをして鼻から荒々しく息を吐いた。

「で、でも止めようよ。乱暴するのは」

発言したのは俊太の友達の隆一だった。なんでだよ？ という俊太の問いかけに、読書好きでおとなしい性格の彼は、眼鏡を上げておどおどと答えた。

「だってさ、イジメの話でしょ？ こういうことは先生に任せ方がいいよ。それに、

女の子に暴力振るったらダメだよ……」

「先生にはもう言ってるんだよ」

答えたのは誠だった。いつも通りの淡々とした口調だ。その後を俊太が引き継いだ。

「女子の間で男子が虐められてるって、俺ら3人でカオルちゃんに言いに行ったんだ」

カオルちゃんとは、以前に担任を受け持ってもらったことのある、黒谷薫という若い体育教師だった。

女みたいな名前だからと、親しみを込めてちゃん付けで呼ばれているが、学生時代に競泳でならした逞しい男性教師だった。

優しさで厳しさを兼ね備えた、生徒の気持ちを良く理解してくれる、3人にとっては一番信頼のおける先生だった。

「カオルちゃんなら何とかしてくれると思って、何度か催促してみたんだけどさ、どうも難しいらしくって。大人ってほら、イジメとかすぐ隠したがるじゃん？ 証拠とか無いとダメみたいでさー」

「そう言うなよシュン。カオルちゃん、けーこ先生のことがあつてから、ちよつと疲れてる感じだからさ。ちゃんと先生やってるだけでも凄いなと思うぜ」

黒谷薫は、以前この学園で教鞭をとっていた恵子という、愛を誓った伴侶を、夏休みの終わりがら交通事故で亡くしていた。

彼は酷く心を痛め、夏休みが明けてからも、教師生活初となる長期の休職を取っていたほどだった。

現在は無事復職を果たしているが、『女子会』という難題に取り組むのは難しい状態なのは少年らの眼にも明らかだった。

「かといつて、他に頼りんなるセンコーなんていないからさ。だから、俺達でなんとかしなきゃダメなんだよ」

強い口調で克己に言われ、隆一は不承不承と言った様子で肯いた。

「でも、どうやってやるつもりなんだよ？ 女子とはいえ、あいつらかなりの数だぜ」  
そう訊ねたのは樺島英悟という端正な顔立ちの少年だった。

活発なスポーツマンで、女子からの人気も高い上級生の中心的存在だ。克己とは折り合いが悪く、しょつちゅう衝突しているが、緊急事態だからとこの集まりに参加させられているのだった。

その後ろには樺島の友人——克己達がよく金魚の糞とからかっている少年2人が不満げな面持ちで控えていた。

「樺島。大勢相手の喧嘩の必勝法を教えてやるよ。頭を潰すことだ。白峰聖蘭って知ってるん？」

「聖蘭ってあのいつこ下のおっぱいがやべー可愛い娘だよな」

「そう。あいつが女子会のまとめ役だって話だ。自分の事名前前で呼ぶし、ぶりっ娘みてえでいけすかねえ女子だと思ってたがよ、あいつ、やばいのは乳だけじゃないらしい。運動も勉強も抜群で、おまけにセンコーに気に入られて、簡単に丸め込まうってさ」

「誰から聞いたんだよそんなこと？」

「俺の弟がスパイになってくれてるんだよ」

克己の代わりに答えたのは俊太だった。

「あいつ昔っから年上には可愛がられるからな、警戒されずに情報収集できるんだ」

「おかげで、白峰以外の女子会の目立つ面子のことも知れた。祐樹には感謝しねえとな」  
克己はそう言って机の上に出たA5版の学習ノートをパンと打った。表紙には赤マジックでマル秘と書かれていた。

「これに、スパイ記録を書いてやがるんだ。可愛いもんだろ？」

「目立つ面子って、例えば誰なんだ？」

「白峰の他には、はなだゆうり縹悠李だな。こいつは総合格闘技のジムに通ってて、かなり強いらしい。それから、俺らと同じ学年の瑠璃園るりぞのかの子供ってクソ女」

克己が名前を読み上げると、その場にいた全員が溜息を吐いた。

「あの、ワガママな」と俊太。

「いつもピーピーうるさい瑠璃園か」とは誠の弁。

「その瑠璃園だ。俺が他の女子に聞いた話だと、あの阿魔、いち早く白峰に取り入ったらしいぜ。上級生のプライドもなく」

克己は吐き捨てるように言った。

「でも、ちよつと……いや、かなり可愛いよね」と漏らした隆一は、全員からオバケを見るような視線を向けられた。

「俺もかのんちゃんにはパスだわ。確かに顔はいいし、その、大人っぽくて隆一が惚れるのもわかる……けどさ、頭悪いし、痩せたいとか言いながらいつもなんか食ってるし」

樺島は辟易したと言わんばかりに手をひらひらと振った。

「そーいや樺島は瑠璃園に告白されたことあったっけ。モテる男はつれえな」

「赤畑てめえ……」

「いや、マジで同情してますって樺島君……んで、他の女子だけど、すおう蘇芳って名前のい  
つもふたり一緒にいる変な双子と、ぬればきつか濡羽橘花ってデカイ女だ。知ってるか？ シュン」

「双子の方は何度か喋ったことあるな。俺と同じ飼育委員で、下の名前はええと……え絵  
理と真理だったかな。どっちも結構可愛かったし、優しそうだったけどなあ」

俊太の言葉に、誠が反駁する。

「女つてのは虫も殺さないような顔をしてあげつないもんだ。濡羽の方は俺が知ってる。  
幼馴染だ……一応」

「へえ、初耳だな。どういう関係なんだ？」

「昔うちの道場とこと交流のあった虹ヶ丘の古武術道場の娘だ。親同士でモメてからは会っ  
たり話したりしてないけど」

「ふーん。そうか。道場の娘ってことは、こいつも警戒しておいた方がよさそうだな」  
「そんなことはいいけどよ赤畑」

樺島は苛立たし気に机を指でコツコツと鳴らした。地元の少年サッカークラブを強引に  
サボらされたのが不満なのである。

「女子会の頭——白峰を潰すっても、このマル秘ノートによれば、女子会の人数は女子だけで少なくとも毎日20人は学校に残ってて、総勢は50人以上かもって……無理ゲーだろ」

「いや。簡単だ。白峰の帰り道で待ち伏せするんだよ」

赤畑はスマートフォンを取り出し、地図アプリを起動した。

「祐樹が調べてくれた白峰の下校ルートに1か所人通りの無い竹藪沿いの道がある。2手に分かれて片方は後ろからつけていって、もう片方は藪の中で隠れておくんだ。そして白峰が通りかかったら挟み撃ちだ」

「お前、そんなの闇討ちじゃねえかよ」

「そうだ。闇討ちだ」

「だけど学校では相手が多すぎるし、狙うならここしかない」

樺島の言葉に誠と俊太が矢継ぎ早に答えた。

「お前ら、本気かよ……」

「本気だ。だからお前にも声かけたんじゃねえか。やるなら数が多い方が良い。男子全員が舐められてんだぜ？ ちょっとくらい勇気みせてみるよ」

「つったつてよお……？」

簡単に乗ってこないのはあらかじめ分かっていた。克己はよどみなく用意しておいた殺し文句を出した。

「それに、女子会なんて下らねえ遊び止めるって約束させたらそこで俺らの共闘はお終いだ。後は、お前らの自由にしていい」

「はあ？ そりやどういう意味だよ」

「血の巡りの悪いやつだな。白峰聖蘭のバカデカイ胸もそれ以外も好きにできるんだぜ。役得だろ？」

樺島は背後の友人と顔を見合わせ、少し逡巡してから、克己の方を見てニヤリと笑った。

「オーケーオーケー。乗ってやろうじゃねえか」

「そうこなくっちゃな。流石は樺島英悟だ」

そう言っつて席を立った克己に、俊太が慌てて耳打ちする。

「かつちん、そりやいくら何でもまずいだろ、それつてつまり、その……ゴーカンじゃん」

「レイプともいうな。でも心配すんな。共闘が終われば、自由なのは俺らも一緒だ」

「え、かつちんも白峰のことゴーカン——」

「馬鹿、んなわけあるか」

克己は慌てて俊太の口を手でふさいだ。

「餌で釣つて土壇場であいつらを止めるつてことだよ」

と、答えたのは誠だ。

「そういうこと。今は樺島みたいなボケでも力を借りたいからな」

内緒話をする信号機トリオに不審そうなまなざしを向ける樺島達を適当にごまかし、克己は教室の前の大きな実験机に飛び乗った。

煙となんとかは高いところという囁きを無視して、

「つーわけだ。今日俺らは白峰率いる女子会に奇襲をしかける！ そのための共闘だ。一緒に帰るやつも何人かいるみたいだが所詮女子だ。俺ら男子が本気を出せば絶対に負けねえ！ 散々つばら男子を舐めたことを、女子会の女どもに思い知らせて——」

と、その時だった。突然、大きな音が室内に響いた。

教室の前の扉が勢いよく開かれたのであった。

外から南京錠がかけられているはずなのに——

先生達に侵入がばれたのかと、一同は緊張した面持ちを入口の方へ向け、そして、言葉を失った。

「随分大きい口叩くじゃないですか先輩♡ 誰に何を思い知らせてくれるんですか？」  
入ってきたのは白峰聖蘭だった。威圧的に腕を組み、入口から注ぐLEDの光を背に受けて堂々と仁王立ちしていた。腕にしたから押しあげられた、乳房が誇らしげにせり出している。

聖蘭の後に続いて、女子達もゾロゾロと教室に入ってくる。

名前の挙がった主要なメンバーは勢ぞろいしていた。

「ちーす先輩。思い知らされにやってきました女子会ツス♪」

と完全に舐めた口を利く体操着姿のショートカットのボーイッシュな少女——縹悠李。

「どうも」

小さくお辞儀をする、全身黒ずくめの長身の少女——濡羽橘花

「ねえ真理、先輩たちこんなところにコソコソ集まってなにしてたのかな？」

「悪だくみだよ絵理。私達のこと潰したいんだって」

手を絡め、顔を寄せて話し合うシンメトリーの双子少女——蘇芳絵理と真理。

「あれあれ？ 英悟お？ 珍しいじゃーん赤畑君達と仲悪いのに」

調子はずれにはしゃぐ、遊び好きそうなピンク髪の少女——瑠璃園かのん。

その後ろにも数名の女子の、不敵に笑う顔が見えた。

あまりに突然の展開に、男子一同はしばし啞然と口を空けていたが、克己はいち早く我に返って、威嚇的な表情でまくしたてた。

「くっそ、てめえら、どうやって鍵を……!! いや、そもそも何でここに俺らがいるってわかったんだよ」

「鍵なんて先生に“おねだり”したら簡単に借りられますよ♪」

白峰聖蘭は余裕めかしてくすくす笑った。

おねだりという言葉に秘められた意味は分からなかったが、赤畑はなぜかとても卑しく淫らかな意味が秘められているような気がした。

「ここに先輩たちがいるって言うのはですねえ……教えてもらったんですよ」

「はあ？ 一体誰に……」

「ふふ、おいで♪」

聖蘭が後ろに手招きすると、叱られるのを予期するみたいながびくついた足取りで一人の小柄な男子が入ってきた。

俊太の弟の祐樹だった。

「祐樹!? お前どうして」

俊太が驚愕の声を上げる。

狼狽える祐樹の手を引いて、聖蘭はその小さな体を後ろから抱きすくめた。

「ユーキ君が、ココにいるって教えてくれんですよ♡ ね、ユーキ君、せーらお姉ちゃんのこと大好きになっちゃったもんねー♡」

爆乳に後頭部を沈められながら、祐樹は口をつぐんだ。

だが恥ずかしそうに俯けられた赤面は、ハイと言うより強く少女の言葉を肯定していた。

「おい、お前何やってんだよ、俺達のこと裏切るつもりか!!」

「ひっ……ごめんなさい……」

「謝らなくていいんだよ♡ ユーキ君は正しいことをしたんだからね♡ すぐにお兄ちゃん達も分らせてあげるから、せーらお姉ちゃんに任せてね♡」

聖蘭はそう言って祐樹の額にキスすると、彼を後ろに下がらせた。

教室内の緊張感が一気に高まった。まさに一触即発。

克己は女子達に注意を向けつつ、俊太と誠に視線を送った。

どうする？ と二人は目顔で判断を依頼していた。

数で言えば相手の方が上回っているが、幸い教師を呼んできたというわけでは無いようだった。

しかし、乗り込んできたからには用意があるはずだ。

機先を制された以上、三十六計逃げるに如かずの兵法を実践するのも一つの手だ。

けれど赤畑克己は日本男児である。

年下の、あまつさえ女を相手に尻尾を巻いて逃げたとなれば、学園中の物笑いの種だ。

プライドが許さない。

やってやる。

これはチャンスでもある。飛んで火にいる夏の虫、樺島達がどう動いてくれるかは分か

らないが、だしぬけに3人で聖蘭あたまを叩けばそれで事は終わる。

「それでよお白峰」

克己は声を低めて言った。

背中に隠した手で仲間に見えるように「仕掛けるぞ」という意味のサインを出していた。

「白峰、てめえ俺らに何の用があつてここに来たんだ」

だが、聖蘭の答えは意外なものだった。

「まあまあそんなに鼻息荒くしないでくださいよ。せーらはねえ、先輩達に決闘を申し込みにきたんですよ♪」

## 3. 決闘

体育館は20人余りで利用するにはあまりにも広く感じられた。がらんとして、静かで、歩く音さえアーチ形の天井に反響した。見上げると梁の一部にバレーボールが挟まっていた。何年前かに、克己がふざけて蹴り上げたものだった。

2つあるバレーボール用コート枠のそれぞれで、男子と女子が睨みあっていた。入り口側のコートには黄崎俊太と縹悠李、舞台側のコートは青海誠と濡羽橋花という組み合わせだ。

女子会が持ちかけて来た決闘が始まるうとしているのだった。それぞれに代表2人を出し合って、一対一で喧嘩をさせる。

決着はどちらかが参ったをするか、立ち上がれなくなるまで。

2つの試合を終えてなお白黒つかない場合、即ち1勝1敗となった場合、赤畑克己と白峰聖蘭の大將戦となる運びだった。

「分かってんだろうな。白峰このタイマン勝負で俺達が勝ったら、お前らは女子会を解散して、二度と男子を虐めないんだな」

バスケットボールのゴール下で、克己に釘をさすように言った。

「もちろん。先輩こそ、せーら達が勝ったら『女子の奴隷にでもなんでも』なってくれるんですよ」

聖蘭は自信たっぷりの面持ちで、克己が条件を飲んだ時のセリフを口にした。

コート内を見守る男子連中は壁際に固まって緊張した面持ちを浮かべている。対照的に女子達はリラックスした様子で、舞台のへりに腰を掛けて寛いだり、床にだらしなく座ってぺちやくちやくとお喋りをしたりしていた。

(女子会のやつらはよっぽどの馬鹿なのかもしれない)

克己は事の運びに思いを巡らせ心の中でせせら笑った。

俊太も誠もそれぞれの格闘技の黒帯の実力者だ。いくら相手も格闘技経験者とはいえ、女相手に負けるはずがない。

理科室で乱闘に持ち込まれるか、移動中に襲われたなら、痛い目に合っていたのはこちらだったかもしれない。

それに、そうなっていた場合、もっと大事になっていただろう。けが人も出る。騒ぎを第三者に知られる。

そうなれば先生や親に怒られるだけでは済まないかもしれない。

ここであれば、そんな心配は少ない。

特別な行事も無いのに、土曜日の放課後の体育館にくる先生も生徒もいないからである。体育館の鍵は、理科室の鍵と同様に聖蘭が持ってきていた。

“おねだり”とやらをしたのだろう。

聖蘭のことを良く思っていない克己でさえ、可愛いと思ってしまう。それくらいの美少女だ。しかも、身長は克己より高く、スタイルが抜群にいい。

短いスカートから伸びる、ストッキングに包まれたムチムチの脚。

紫のパーカーを膨れ上がらせる巨大な乳房はまさに圧巻だった。

(近くで見るとやっぱすげえおっぱい……)

男の願望を凝縮したみたいな肉感的な少女の体が、克己の無意識の眼差しを魔法のように吸い寄せていた。

「どうしたの先輩？」

「いや……別になんでもねえよ」

克己は淫らな気持ちを弾きだすように頭を振った。

(後でタイム張るかもしれない相手に何考えてんだ)

けれど、俊太か克己のどちらかが負けるとは考えられない。それよりも、相手を怪我させないか心配なくらいだった。

「シユン、誠！ 手加減してやれよ、相手は女子だし年下だ」

克己なりの激励に「りよーかい」という俊太の声と、同じ意味の誠の一瞥が帰ってきた。そして、男の意地をかけた闘いが始まった。

審判役の女子の試合開始の掛け声と同時に黄崎俊太は帽子を横に被りなおし、中段で構えると、改めて目の前の縹悠李を観察した。

茶色のショートヘアをヘアピンで止めている。ボーイッシュな顔立ちだ。可愛いとカッコいいの中間というところか。

瞳がぎらついている。気合は十分、男相手に気負う様子はない。

身長は同程度。体重も変わらないだろう。

体操着にブルマ、足には上履き。

手には、総合格闘技選手らしくオーブンフィンガーグローブを装着している。

サウスポーで、ファイティングポーズは、ややガードを下げたボクシングスタイル。組

付きや投げもするつもりだろうが、ストライカー打撃主体らしい。

「どうしたんスカ先輩？ ビビってんなら、優しく負かしてあげますけど？」

悠李は両腕を広げて顎を曝け出し、ニヤツと笑った。

見え透いた挑発だ。動じることもない。

「そっちこそ、いつでも仕掛けて来たらいいじゃんか」

「じゃ、お言葉に甘えさせてもらうッス」

言い終える前に悠李は前に出ていた。

大きなステップインからの右のジャブ。

ではない、フェイントだ。

俊太の左手が反応すると同時に、左ストレートが閃いた。

だが、見えている。外側に払う。

と、同時に右のローキックが来た。対角線の攻撃だ。

スナップを効かせた鋭い蹴り。咄嗟に受けた脛に痺れが走った。

顔が歪む。だが、ひるまずに右突きをやり返した。

すんでの所で、スウェーで避けられる。

「へえ」

感心したように悠李が声を上げる。

口元が笑っている。殴り合うのが心底愉しいとも言いたげだ。

悠李は攻勢を緩めない。アグレッシブに攻め立てていく。

左ボディ。右のダブル。内腿を狙ったローキック。

素早いコンビネーションを、俊太は水のように捌いていた。

きわどいタイミングだが、見えない攻撃では無かった。

致命打を避けつつ反撃するが、華麗なウェービングでかわされる。

お互いに決定打はないが主導権は悠李が握ったままだ。

けれど、俊太は勝利を確信していた。

彼女は左のストレートを打つときに、ガードが上がる。

癖だ。それを狙った。下段への攻撃も意識的に減らしていた。

(目にモノ見せてやる)

と、思うと同時に好機が到来した。顎をめがけて左が来た。

手首を強く払い、内側に捌いた。悠李の身体が流れ重心が崩れる。

少林寺拳法は攻防一体だ。捌く動作が攻撃に繋がる。

俊太は空いた脇腹に、渾身の左の中段蹴りを放った。

「くふっ……！」

重たい衝撃に悠李の上半体が折れる。

俊太は攻勢を緩めず、突き出されたままの左腕を取りに行った。

逆手羽にねじり上げて極めてしまうつもりだった。

だが、悠李は身体をひねって掴まれた手首を振りほどき、距離を取った。

「つうう……少林寺って受けるばかりかと思ってたけど、結構面倒臭いツスねえ……」

「へへんっ、当たり前だろ。降参すんなら許してやってもいいんだぜ」

「優しいんスね先輩。でも、本気ださせてもらうツス」

悠李の構えが変わっていた。

身体を前傾させ、重心を前に。ガードさげ、手を開いている。

フリースタイルレスリングやサンボに見られる系統のフォームだ。

タックル狙いに切り替えたのだろう。

(実は組技主体グリップブレイってわけ……嫌な女)

俊太は構えを代えず、狙いに気が付かないふりをした。

軽口を叩いていたが、さっきの蹴りは効いたはずだ。

1発で倒れないのが意外なくらいであった。

——勝てる。そう確信した。

緊張が高まる。観戦者の女子の声が遠くで聞こえていた。

と、突然何かを床に叩きつける物凄い音がした。

隣のコートからだ。

おそらく、誠が橘花を投げ飛ばしたのだろう。

振り向く余裕は無かった。

音と同時に、悠李が前に出ていた。

相手の股の下をくぐろうとするかのような、低空タックル。速い。しかし、読んでいた。

飛び込み様に、膝を合わせていく。

酷いけがになるかもしれないが、加減が出来る相手では無かった。だが、予想外のことが起こった。

突っ込んでくるはずの悠李の軌道が直前で変わった。

出そうとしていた膝が止まる。

狙いがバレて停止したのか？

違う。飛び上がっていた。

タックルの勢いを踏切に転換し、体操着の少女は高らかに飛んだのである。

空中で膝をたわめ、両足をぴたりと合わせていた。

最高点に達したところで、バネが解放される。

ミサイルのような凄まじい勢いで、両足が奔った。

(ドロップキック——!?)

想定していなかった動きに少年の対応が遅れた。

辛うじて右手でガードしたが、強烈な重さが腕の上から顔面を叩いた。

帽子が吹き飛び、浮き上がった身体が、勢いよく後ろへ弾かれた。

硬い床が身体を打つ。

鼻から血が出ている気配がする。

しかし倒れてはいられない。手をついてすぐに立ちあがる。

軽い脳震盪を起こしているらしい。頭がぐらついた。

「ど、どこに……」

目の前にいたはずの悠李の姿が無い。

きよろきよろ左見右見していると、ふいに腰と太ももを掴まれた。

「後ろッス」

声と同時に俊太の身体は再び浮き上がっていた。

背後に回った悠李に身体を持ち上げられたのである。

体重が無くなる感覚。俊太の視界の中を猛スピードで壁が走り抜け、天井が過ぎていく。

(あ、これ、動画でみたことあるやつ——)

バックドロップであった。

次の瞬間、凄まじい音と共に少年はフローリングに叩きつけられていた。

ギリギリで後頭部は守ったが、落下の衝撃は防ぎようが無かった。

肺の空気が全て吐き出され、脳が頭蓋骨の中で揺れる。

(なんで総合格闘技をしている悠李こいつがドロップキックやバックドロップを——?)

疑問に思いながらも俊太は立ち上がり構えをとろうとする。頭がくらくらし、足元がおぼつかない。悠李の姿がない。

性懲りも無く——。咄嗟に背後に気配を感じた少年はノータイムで裏拳を振り抜いていた。

「うひ〜あつぷ」

しかし拳は悠李の鼻先を掠めていた。俊太の感覚よりも遅い拳を戻すより前に、腕を掴まれていた。

「ふっ！」

呼吸と共に少女の足が床を蹴り、小柄な身体が浮き上がった。

ブルマから伸びた長い両脚が、蛇のようにしゅるりと俊太の首に絡みつく。飛びつきからの三角締めだ。

(曲芸師かよこいつ！)

鍛え上げられたしなやかに強靱な太ももが、俊太が焦って顎を引くよりも早く頸動脈に食い込んでいた。

「お前、なんだって、こんなプロレスみたいな……」

「ん？ ああ、ああ。あたし、実はプロレスラー目指してるんツスよ♪ 派手な技の方が楽しいんで♪」

悠李の脚に力が籠り、頸動脈がいよいよ圧迫される。

かろうじて呼吸は出来る。だが脳に酸素がいかない。

「うく、くく……」

俊太は空いた手で絡みつく脚を解こうともがくが、まるで皮膚に吸い付いているように離れない。指をねじ込むことすら不可能だ。ならばと今度は、悠李もろとも腕を振り上げ床に叩きつけようとしたが、もう余力は残されていなかった。視界が黒く霞んでいく。

「ひひひ……無駄無駄。もう完全に極まってるツス♪ 太ももで締められて落ちるなんて、なかなか幸せじゃないツスカ♪」

(こいつ……へらへらしてるだけかと思ったら、女の癖にめちゃめちゃ強ええ……か、勝てない……)

「それじゃあ、約束通り優しく負かしてあげるツス♪」

声と共に、更に強く頸動脈が絞られた。

苦しくも痛くも無い。寝入りばなのような浮遊感があった。

黒い幕が徐々に下り、眠る前のように意識がぼやけて――。

やがてブラックアウトした。

青海誠は濡羽橘花と対峙していた。

白い肌とコントラストを形成する黒い長髪。

白のセーターにサスペンダー付きのスカート。

身長は高く、顔だちも大人びている。

肉体も相応に女性的に発達していて、聖蘭ほどではないが、同年代の少女に比べればずつと胸が大きい。

大人しそうで、一見すると格闘技をやっているようには見えない。

だが、誠はその印象が間違いであることは重々承知していた。

誠は昔とは見違えるほど大人っぽくなった幼馴染に、どう話しかければいいか分かりかね、しばし沈黙していたが、やがて頭を搔いて言った。

「久しぶりだな」

「うん」

静かに肯く。謎めいた瞳は誠を真つすぐに見ていた。

「親父さん、元気か？」

「それなりに」

「そっか」

双方ともまだ構えない。

なのに、息が詰まりそうな空気が二人の間を埋めていた。

「誠。言いたいことがあるなら早く言って」

外野も何も言わない。隣のコートへの歓声が遠くで聞こえている。

「橘花、女子会なんて下らない事やめちまえ」

「いや。せーらちゃんのこと好きだから」

静かな声だが、強い意志を感じさせる言葉だった。

誠は「まいったな」と頭を搔いて、溜息を吐いた。

「なら、俺がお前に勝ったら。お前は女子会とは手を切れ」

「ふふっ……」

無表情だった橘花が堪えられないと言うように噴出した。

「何がおかしい」

「私に勝つだなんて……誠、私に一度も勝てなかったこと覚えてるよね？」

「それは……」

言い返せない。小さかった頃、親の道場同士で交流があった頃、親睦を深めるためと対抗で練習試合をしたとき、誠はいつも橘花にコテンパンに負かされていた。他の同年代の相手には勝てるのに、彼女にだけは手も足も出ないのだった。

「いつも痛がって泣いちゃってたじゃない。年上なのに」

「昔のことだ。俺だって、あの頃とは違うさ」

「弱い誠が？ ふふ、それじゃあやってみたらいいよ。勝てたら、言う通りに女子会は抜けてあげる。あっちの俊太って子が負けて、大將戦で聖蘭ちゃんが勝ってもね」

「そうか。十分だ。構えろ」

誠は右手右足を前に出して臨戦態勢を取った。

手は握らない。いかにも柔道家らしい構えだった。

しかし、対する橘花は動かさず、呆れたように肩をすくめてみせた。

「相変わらず甘いよね。試合は始まっているんだから、ほら、仕掛けてきたら？」

「余裕だな」

言いがま、誠は素早く前に出た。

橘花が構えるより先に、襟を取っていた。

取ると同時に軽く突きを入れていた。

橘花の表情が驚きに彩られる。

「悪い。痛くする」

前に崩し、重心を落とし、筋肉を一気に緊張させ、橘花の身体を担ぎ上げた。

背負い投げが見事に決まっていた。

硬いフローリングだ。投げが決まれば一発で片が付く。

勝利への興奮と、相手を痛めつけたことへの申し訳なさを胸に誠は起き上がった。

「馬鹿な……」

いつも無表情な少年でも、驚きを顕わにせずにはいられなかった。

橘花は誠よりも先に立ち上がった。

涼しい顔をしているが、右腕は不自然にだらりと下がっていた。

「随分荒っぽいやりかた覚えたのね。わざと捻って肩から叩きつけるなんて、柔道のルールじゃ反則なんじゃないの？」

橘花の右肩は脱臼していたのである。

普通に背中から落としても受け身を取られる。

この勝負のルール上、一本は無い。

なら、相手にダメージを与えて戦えなくしてしまえば早い。

誠はそう考えていた。

予定通り、肩は抜いた。

なのに、橘花は立ち上がってきたのであった。

立ち上れる痛みではない。大人の男でも悶絶する。

「今は柔道をやっているんじゃない？」

「ふふ、いい顔。だけどそれならどうして投げ飛ばした後、馬乗りになって殴りつけるなり、絞め落とすなりしなかったの？」

不思議そうに言いながら、橘花は自らの手で外れた肩を無理やりハメた。

周囲で観戦している少女が「痛ッ」と眼を背ける。

見ている方が痛いくらいなのに、橘花はさつきと同じく涼しい顔で、まるで髪をかきあげでもするみたいに、それをやってのけたのである。

誠は青い顔をしていた。

「お前、痛く無いのか？」

「別に」

「別にとって……」

「ぼさつとしてちゃダメ」

「な!？」

会話の途中で橘花は前に出てきた。ダメージを隠しているという風な動きではない。

誠は反射的に猿臂を伸ばし相手の襟を取ろうとした。

だが、その手首を逆に取りられてしまった。

(まずい——)

そう思った次の瞬間には、肘を固められ転がすように投げられていた。

横向きに倒された誠の側頭部に足底が落ちてきた。

躊躇の無い、重い一撃だった。

硬い床に頭が強かに叩きつけられる。

激しい脳震盪と割れるような痛み。口の中に鉄の味が広がった。

頭がくらくらしたが、辛うじて意識をつなぎとめていた。

「残念ね。こんなものだなんて。やっぱり誠は成長してない」

誠の顔を上履きで踏みにじりながら、橘花は冷たく言い放った。

まだ手首は捉えたままだった。誠の肘と肩は真つすぐ伸びている。完全に極まっていた。少し力を加えれば折れてしまう状態である。

橘花は勝利の笑みを口元に湛え、誠にだけ聞こえる小声で語りかけた。

「覚えてる？ 最後に試合した時のこと」

覚えている、いない、という話ではない。今でも夢に見る。

それが切っ掛けで親同士が口論になり疎遠になったのだ。

しかし、その一件で誠が何より覚えていたのは、痛みだった。

「その顔、覚えてるんだ。当たり前か、骨、折られたもんね」

骨を折られた瞬間の激痛、自分の身体が破壊される恐怖。

それはその後の人生で味わったどんな種類の苦痛よりも強烈に、鮮烈に、誠の記憶に刻まれていた。

「あれ、どれくらい痛かったの？ 私、痛がってる誠の顔みて凄くゾクゾクしちゃって……今でも時々思い出すの」

橘花は足の下で恐怖に震える誠の横顔を覗き込み、恍惚とした表情を浮かべていた。

「また、折らせてもらうね♪ 今度はどんな声聞かせてくれるの？」

「ひ……」

誠の意思は痛みと、そして克服したと思っていた橘花への恐怖で支配された。

橘花の腕に力がこもった瞬間、彼の手は床をタップしていた。

痛みの恐怖にプライドが敗北した決定的な瞬間だった。

「がっかり……」

少女はつまらなそうに言い、誠の手を解いた。

もう一つのコートでもちようど試合が決着していた。

しかし、橘花はまるで意に介していない様子で、無気力に床に這いつくばる誠を見下ろしたまま、唇から零れた血を指先でぬぐい取り、口に含んだ。

少女とは思えないほど凄艶で淫らな仕草だった。

「あり得ねえ……」

僅か3分足らずの間起った予想だにしていなかった出来事に、克己はただただ驚愕し、受動的な視覚と聴覚を有する傍観者と化していた。

俊太と誠、少林寺と柔道の有段者である親友二人が立て続けに年下に、しかも女子にタスマン勝負で敗北したのである。

「あつは♪ あつさり片付いちゃったじゃない。ユーリ！ キッカ！ グッジョブ！」  
克己の隣で聖蘭が勝者に向かって手を振ってはしゃいでいる。悠李と橘花はそれぞれのやり方でそれに答えた。

まるで悪い夢でも見ているようだ——。

もしそうであれば覚めてくれと普通ならば思うかもしれない。

だが、赤畑克己は現実から逃げられるほど知的ではなかった。  
その代わりに起こったことを起こったこととして受け止める動物的な素直さと、自分の意思を貫き通すための瞬発力を備えていた。

「さて、約束通り——」

言いかけた聖蘭に克己は飛びかかっていた。  
今ならまだ、聖蘭を叩きのめすことが可能だ。

その後上手く立ち回れば「奴隷にでもなんでも」なんていう汚らわしい約束を帳消しにして、女子会を潰してしまうことだってできるかもしれない。

そうでなくとも、『色彩の信号機トリオ』ともあるう者が、いともたやすく女子にやられたなんてことにはならないはずだ。

そういう小賢しい理屈は動き出したコンマ数秒後に、猛進する克己の思考に追いついてきた、後付けに過ぎない。

白峰聖蘭という少女にイライラしていた克己である。  
一発ぶん殴ってやる。そうしないと気が収まらない。

それに――。

こいつは、ココで叩き潰さなければならぬと心のどこかで感じていた。  
動物的な直感で怒りに火をつけて、渾身の右ストレートを放っていた。  
しかし。

「きゃあん♡」

聖蘭は鼻にかかった媚声を上げ、身を守るようなポーズを取った。

両肘で圧迫された爆乳が悩まし気に揺れる。

「うっ！」

反射的に目が奪われる。数瞬、克己の動きにズレが生じた。

間抜けな拳は聖蘭の肘を叩いて外へそれてしまった。

スカを食らった形、克己の身体が大きく泳ぐ。

「はい。ひっかかった♡」

「うわっ……!?!」

一瞬の隙をついて、聖蘭は克己に体当たりした。自慢の爆乳を武器にした大胆な突進攻撃だ。張りど重量感を兼ね備えた巨大な肉の塊にぶつかられ、克己は壁まで弾き飛ばされてしまう。

「痛って！ おわっ……!?!」

強か後頭部をぶつけ、くらくらと来て、壁にもたれるように倒れそうになった克己の目の前に聖蘭の爆乳が迫っていた。

それはまさに肉の壁。視界がおっぱいで埋め尽くされる。

「えいっ♡」

むぎゅうつ……と、まるでサンドイッチの具みたいに、克己は壁とおっぱいの間に挟み込まれてしまった。

「はい、これでせーらの勝ち♡」

「むぐぐ……」

「先輩ちょっと酷くないですか？ 約束やぶっていきなりせーらに暴力振るうなんて。

まあ、それで返り討ちに合ってるんだから究極的にカッコ悪いですよね♪」

克己の顔面に爆乳をグイグイと押し付けながら、聖蘭は挑発的に笑った。

「せ、せーらちゃん大丈夫？ 怪我とかしてない？」

ドタドタ駆け寄ってきたかのが、過保護な親のように心配げに声をかけ、克己をきつと睨み付けた。

「赤畑マジ最低。あーしのせーらちゃんの顔に傷でもついたらどうすんのよ！　せーらちゃん、こいつ全員でボコっちゃおうよ」

「大丈夫大丈夫。こんな雑魚せーら一人でユウだから♪」

「誰が雑魚だ、舐めやがって……」

プライドを傷つけられた少年は、顔を真っ赤にして聖蘭を押しつけようとするが――

「はいはい、暴れちゃダメですよ先輩♡」

「ふむぐ……」

重量感のある柔らかな乳肉が首から上をもみくちゃにする。

それだけで、克己の身体から不思議と力が抜けていく――。

その様子を見て、かのは納得したようだった。

「それもそっか。せーらちゃんに敵う男なんていないもんね」

「そういうこと。だからルリルリ以外は誰も心配してないでしょ？　ルリルリは他の男子逃がさないようにしておいて」

俊太と誠の敗北は男子側に非常なショックを与えたようで、体育館の各所では男子と女子の緊迫した鬼ごっこが展開されていた。

しかし、唯一の出入り口は複数の女子生徒によって閉鎖されていた。

男子側が全員捕まえられるのは時間の問題だった。

「オッケー♪　じゃあ、あーしは樺島君捕まえてくるね♪」

「はいはい♪　よろしくね」

上機嫌で男子狩りに加わったかのを見送ると、聖蘭は克己を見下ろし嗜虐的に口元を歪めた。

「ふふ、それじゃあ先輩……せーらに手を上げたお仕置きをしてあげますね……♡」

「何が、お仕置きだ……舐めやがって」

「もう勝負はついたんですよ？　約束通り、『奴隷にでもなんでも』なってもらいますからね♡」

「俺は男だぞ、女の奴隷なんてお断りだ……くそ、なんで……体に力が入らねえ……」  
克己はさつきからずっと、肉の壁を押しつけようと必死でもがいていた。

けれど、まるで思うようにいかない。

本気で暴れようとしているのに、身体が脱力して、芋虫のように不甲斐なく身をよじることしか出来ないでいた。

「無駄無駄♡　せーらのおっぱいには大人の男でも勝てないんだから♪　でもでも、おっぱいに捕まって負けちゃうなんて、おっぱい好きの先輩にはご褒美ですよね♪」

「誰がそんな……好きじゃねーよ、こんなでかいだけの……気持ちわりい」

「気持ち悪い？　さつきから何度もせーらのおっぱいチラ見してたくせに、何言ってるですか先輩」

（うげ、バレてたのか――）

克己は語るに落ちるような言葉が出そうになったが、飲み込んで、

「見てねえっ！」

と、否定するが、少年は隠し事が出来ないように生まれついた直情型で、羞恥のあまり荒くなった語気と、ユデダコのように赤くなった顔は、容疑を完全に認めていた。

聖蘭はそんな克己を小馬鹿にしたように、ふふん、と鼻を鳴らす。

「隠したって先輩のエッチな視線、せーらにはわかってましたよ♡ ウソツキの悪い先輩は、自分がおっぱい好きだって認めるまで、せーらの爆乳おっぱいでイジメて上げます♡ ほら、こんなふうにい……パフ、パフ♡ パフ、パフ♡ パフ、パフ♡ パフ、パフ♡」

「んあっ……ああああ……」



パフパフ……という馬鹿げた掛け声に合わせて、柔らかく温かなおっぱいがむにゅむにゅと克己の顔を揉みこんでくる。

常識外れの大きさを存分に生かした、ダイナミックな乳マッサージ。頭全体が得も言われぬ心地よさに包まれる。

少女を押しつけようとしていた腕が自然と弛緩し、体側にだらり垂れさがる。

「ほら、おっぱいふ気持ちいでしょ？ パフパフ、パフパフ♡ それ、もつとパフパフ、パフパフ、パフパフ♡」

「あ、あ、ああああ……」

少年の口から腑抜けた声上がる。恥ずかしくて、情けなくて仕方がない。

おっぱいで顔をこねられているだけ、抵抗しようと思えばできるはずなのに。そんな簡単なはずのことが出来ない。訳が分からなかった。

(なんだこれ……なんだよこれえ……!?)

このパフパフ攻撃は、谷間に捕まえた相手の意思を優しく蕩かし、恍惚の沼に沈める聖蘭の必殺技だ。

大人の男でもこれをされると、何も出来ない腑抜けに変えられてしまう。女体の快樂を知らない初心な少年には効果抜群だった。

おっぱいによる強制的なりラックス。

暴力に訴えようという荒々しい気力が萎えさせられていく――。

「ほーら、これで何も出来なくなっちゃいましたねえ♡ せーらのおっぱいって凄すぎでしょ？ おつきくて、柔らかくって、弾力もあつて……それに、とっても良い匂いするんですよ♡」

聖蘭は天使のような笑みを浮かべ、谷間から辛うじて出た克己の頭を撫でながら静かにゆっくりと語り掛ける。

まるで弟をあやす姉のような優しい声と慰撫だった。

無防備な少年の心の防壁が容赦なく蕩かされていく。

「何かね、男をメロメロにしちゃうフェロモンみたいなのが出てるらしくってえ……みんなとーっても気持ちよさそうにくんくんしてくれるんですよ♡ ほら、先輩もおっぱいの谷間に顔埋めて、息吸ってみて下さい♡」

その優しげな囁き声は天使ではなく悪魔のそれだった。

言われるまで、意識しなかったが、確かに聖蘭の胸の谷間には、独特な、頭の芯が心地よく痺れるような甘い匂いが籠っていた。

汗の匂いかもしれない。

柔軟剤の匂いかもしれない。

香水の匂いと言うことだってあり得る。

強いて言うなら女の子の匂いというところだろうか。

何だっという。とにかく、吸ってはイケナイものだ。

克己の理性は間違いなく息を止めるよう命令していた。なのに――。

「我慢なんてしちゃダメ♡ いっっぱいせーらの匂い嗅いでいいんですからね♡」

克己は聖蘭の誘惑の言葉に従って大きく鼻を膨らませていた。

「ふうふう……んんっ!! ふうふう……♡」

深く息を吸ったとたん、克己の表情は一気にだらしなく崩れた。

おっぱいの匂いが、ピンク色の霧となって頭の中を埋め尽くす。

そして、その霧が脳味噌をじゅわ……と溶かし、気持ちいいということ以外、何も感じられなくしてくる。

そんな錯覚に陥ってしまうほど、匂いそのものが快感だった。

「どうですか？ せーらの匂い♡ 頭が中から溶けちゃいそうでしょ？ おっぱいもっとかんくんして、脳味噌トロトロにしちゃってください、先輩♡」

「ふうふう……ふうふう……んんっ……♡」

聖蘭に言われるまでも無く、克己は一心不乱に呼吸を続けていた。

自ら谷間の深いところに顔を埋め、パーカーの繊維に染みついた匂いを、すんすんと鼻を鳴らして嗅いでいた。

官能の粒子が鼻腔を満たし、脳内が気持ちいい感覚で支配される。陶酔感。恍惚感。多幸感。

どれもが、少年が短い人生で初めて味わった感覚だった。

聖蘭はニヤニヤと笑い、髪の毛を掴んで克己の顔を上向かせた。

「やだ〜先輩ったらひどいお顔になってますよ？ あれだけ馬鹿にしてたのに情けないですね♡」

克己の瞳は危ない薬を打たれたようにドロロンと濁っていた。

頬は紅潮し、吐く息は荒い。軽い酸欠と極度の興奮。

「せーらの爆乳おっぱいの凄さ、わかったでしょ？ 男である以上、絶対に女の子には勝てないって、思い知りましたか？」

聖蘭は、最早グロッキー状態になった克己を見下し嘲り笑う。

まるで女王様であるかのような、尊大な優越を込めた態度が——年上を、男を舐め切った態度が——少年の男としてのプライドを燃え立たせた。

「はあ……ああ……ぐう、うるせえ、このデブ女……」

克己は気力を総動員し、聖蘭の顔にべっと唾を吐きかけた。

だがそれは、やつのことで成し遂げた、精一杯の強がりだった。

「へー先輩凄いやないですか。せーらのおっぱいで可愛がられて、まだそんな態度取れるなんて……♡」

頬に張り付いた唾液を拭う聖蘭の表情は笑っていたが、こめかみが苛立たし気に痙攣していた。

「でもまあ——」

聖蘭の視線がすっ、と下がる。

「身体の方はとくにせーらに降参してるみたいですけど♡」

言うが早いのか、聖蘭は膝で克己の股間を押し上げていた。

散々おっぱいで可愛がられたせいで、克己は興奮の極致にあった。

未発達なモノには大量の血液が流入し、ズボンの前はテントを張ったようになっていた。その、卑猥に盛り上がった部分を膝で押し上げられたのだった。

克己の身体が性的刺激と驚きにビクツと震えた。

「あ、くあ……お前、白峰……どこ触ってやがるんだよっ!？」

「どこって、そんなの決まってるじゃないですか♡」聖蘭は小馬鹿にしたように笑い、「先輩のお……お・ち・ん・ち・ん♡ です♡」

言葉を区切るリズムに合わせて、グイグイとしゃくりあげるように、充血し硬くなったモノを刺激する。

「ああああ……それ、くうう……」

ズボン越しに押し付けられる柔らかな感触に、克己は腰を引いて喘いだ。

「あっは何ですかその声？ さっきまで生意気な態度とってたくせに、情けなくないんですく？ ねえ？ ねえねえ？ くすくす♪」

悶える克己を嘲笑し、調子に乗って太ももで股間を刺激する聖蘭。

黒いタイト一杯に詰まった太ももは、豊か過ぎる胸に比べれば細いが、同年代の少女と比べれば遥かにむちむちと肉付きが良い。

そんな太もが、硬くなった男の部分の擦り上げるのである。しかも、タイトの生地が摩擦を滑らかにし、性的刺激を何倍にも高めていた。太もが前後する度に妖しい快感の電流がペニスの芯を走った。

自分の手で直接握って刺激するよりも何倍も気持ちがいい。

ほんのちよつと刺激されただけのはずなのに、克己はあつという間に腰砕けだった。

「あああ……やめろ、やめろってば……」

腰を引いて逃れようにも、背後は壁だ。

逃げ場のない快樂攻撃に、克己はただみつともなくよがるばかりだった。

「やっぱ先輩も他の男子と大差ありませんね。男子って、女子におちんちん可愛がられたら一発でふにやふにやになっちゃう、よわーい存在なんですよ？ 知ってました？」

「し、知るか。そんな……わけが、あつて……あく……」

「知らないなら、今から教えて……じゃなくて、思い知らせてあげます♡」

聖蘭はペロツと舌なめずりすると、上半身を突き出し爆乳で克己の顔を再び挟み込んだ。巨大な乳肉の谷間で顔をむにゅむにゅと揉み解しながら、ペニスを太もですりすりすりすり……と執拗に刺激する。

「爆乳おっぱいパフパフと、おちんちんぐりぐりのスペシャルコンボ♡ とーっても気持ちいいでしょ？ せんせーだつて気持ちいい以外何にも考えられない馬鹿になっちゃうんだから♡ 先輩何秒耐えられるかなあ……♡」

「ふああつ……こ、こんな……こんなの、ずるいい……」

片方ずつでもたまらなかつた快感の同時攻撃。

耐えられないはずが無かつた。

克己は聖蘭の爆乳に顔を埋め、身も心も蕩けそうな恍惚感ただただに打ち震えた。

もうすでに、パンツが染みるくらいに先走りか溢れ出していた。

柔らかな女体の感触。胸の谷間に籠った恍惚を誘う匂い。

何もかもが少年の中にある芽生え始めた雄の欲望を心地よく煽り立てる。

おっぱいから伝わる刺激と、下半身から伝わる刺激が頭の中でごちゃ混ぜになって、まるで全身が性器になってパイズリ責めされているような、そんな錯覚さえ抱いてしまう。

「ずるいつてなんですか？ マジウケるんですけど♡ ほらほら、もうおちんちんビクビク震えてますよ？ イっちゃいそうなんですか？ 学校一の不良が、女の子のおっぱいに負けて、惨めにびゅっびゅ♡ しちゃうんですか？」

聖蘭の言葉が心に突き刺さる。

けれど言い返す余裕すら克己には無い。

むっちりとした太もがズボンの上から竿をにじる度に、身体がビクビクと痙攣し、徐々に下半身が射精の前兆のもどかしい感覚に支配されていく。

（くそ……女なんか、こんな……むかつくの、悔しいのに……でも、もう……！）  
喧嘩に負けて、女に一方的に弄ばれて、しかも射精まで。

そんなみつともないこと、絶対にしてはならない。

分かっているのに、快樂に抗えなかつた。

痛みなら我慢できるのに、快樂はどうやって我慢していいのかすら分からないのである。

「あはは♡ 抵抗しても無駄♡ 観念してせーらの爆乳おっぱいには絶対に勝てないっ  
ていうことをしっかり脳に刻み付けながら、おっぱいに溺れて気持ちいいびゅっぴゅ  
しましようね、先輩♡」

聖蘭はそう言う和一際強く克己のモノを太ももで刺激した。  
それがまさにトドメの一撃となった。

「あ、あ、ああつ……く、くううう……あああああ……」

爆乳に顔を埋めたまま、克己はビクツと痙攣した。

堤が決壊したかのように、快感が濃厚な奔流となってペニスの内側をゾクゾクと擦り上  
げ、勢いよく鈴口から放出される。

その絶頂は、オナニーで達した時とは比べ物にならなかった。

いや、少年が味わったどんな快樂よりも凄まじい快感だった。

頭の中が真っ白に染まる。気持ちいい。

悔しさも恥ずかしさも、真っ白い快樂の濁流に押し流されていく。

「あつは♡ イっちゃいましたね♡♡ 女子に負けておっぱいでいじめられながらの最  
低で最高の射精、堪能してくださいね♡」



聖蘭は克己を圧倒するようにぎゅうぎゅうとおっぱいを押し付けながら、射精中のペニ  
スを容赦なく太ももで擦り上げた。

その刺激によって、更に精液が溢れだす。

失禁したかのように、少年のズボンがじわじわと黒ずんでいく。

克己は最早快樂以外の何も感じなくなっていた。

流れ込んでくる感覚の全てが、快樂だった。

息が出来ない苦しきすらも、感じない。

天にも昇るような甘い恍惚感に意識がトロトロと蕩けだして――。

「あ、あああああ……あ……あ……」

克己の身体から急激に力が抜けていった。

立っていることさえ出来なくなり、ぐったりと壁にもたれかかる。

「あーあ、気絶しちゃった。ほんつと男子って弱すぎ♪」

聖蘭は糸の切れた操り人形のようにぐったりとした克己を見下ろし、腰に手を当てて勝ち誇るように笑った。

■ サークル 近未来教養文庫

・ぶろぐ [b.dlsite.net/RG30949/](http://b.dlsite.net/RG30949/)

■ 小説 背戸山葵

・ぴくじぶ <http://www.pixiv.net/member.php?id=12952920>

・ついった <https://twitter.com/sedowasabi>

■ イラスト 藤宮やひろ

・ぴくじぶ <http://www.pixiv.net/member.php?id=3353514>

・ついった <https://twitter.com/yahiro1966>

体験版DLありがとうございます。続きは本編でお楽しみください。

## 注意事項

この物語はフィクションです。

登場する団体及び人物は架空のモノであり、実在のモノとは一切関係ありません。  
本作品の無断複写・転載・再配布・WEBへのアップロードを禁じます。

近未来教養文庫

